

令和3年（2021年）1月28日（木）（委員通知）

標記会議につきまして次の通り報告します。

1 議題

(3) 肥満児童（小学4・5・6年生）と痩身児童（小学4年生）について

ア 猪股委員長より質問がありました。

質問内容	令和2年度の肥満児頻度の急増についてどのように考察するか
事務局より回答	<p>新型コロナウイルス感染症蔓延防止による、家庭生活の変容や子どもをとりまく環境の変化が大きく影響したと考えます。</p> <p>家庭内にとどまる時間が長くなり、そのことが、子どもをとりまく環境の変化として、外遊びから屋内遊び（ゲームなど）が多くなり、運動不足をもたらしたものと考えます。また、屋内での生活が増え、過食へとつながったことも肥満増加の結果の要因のひとつになったと考えます。</p>

イ 近藤委員より次のとおり御意見がありました。

内 容	<p><b>資料3-1</b></p> <p>昨年4月、新型コロナの感染拡大により緊急事態宣言が発出され、学校も休校となり、登校する子や校庭で元気に遊ぶ子どもたちの姿が見られなくなった。通常だと新学期早々から児童の健診がスタートするはずであったが、コロナ禍の影響で大幅に遅れ、学校によっては夏休み以降に行われた所も多かったと聞く。5月末には新型コロナの感染収束の兆しもないままに一旦、緊急事態宣言は解除され、学校は不自然な形で再開された。国は国民に3密回避・不要不急の外出自粛を強く求めた。このことにより従来の家庭生活は大きく変容することを余儀なくされた。この過去に経験したことのない生活の変容は、当然のことながら子ども達の日常にも大きな影響をもたらした。家庭内に留まる時間が長くなり退屈にまぎれてゲームにはしり、暇にまかせて口を動かすといった肥満の形成にはもってこいの環境の中で日々を送ることとなった。その結果が資料3-1に示されるような肥満児の急増という現象を招いたと考えられる。</p> <p>小学4年生にみられる肥満度20%以上の肥満児の割合の13.3%という数字は過去最高であり、最低を示した平成24年度の6.4%の2倍以上に相当する。約6か月にわたる子ども達をとりまく環境の変化が、児童の健康にこれ程の影響を与えるとは予想もしていなかっただけに、「子どもは環境の子」という言葉を改めて想起させられた。</p>
-----	--

	<p>令和3年4月には、文科省恒例の全国学校保健統計調査結果が公表される予定で、その結果が注目される。この際、都道府県別にみて新型コロナウイルスの感染拡大地域と、そうでなかった地域との間で、子どもの肥満増に差がなかったかどうか、両者の関係を注意深く観察する必要がある。さらにコロナ禍の影響が子どもの、どの年齢層に最も強く表れたかを知ることが重要である。</p> <p>資料には随所に今年度は健診の時期が例年と異なるため、この数値は「参考値」であると断り書きがされているが、皮肉なことに健診の時期が遅れたことが、逆に現在の子ども達の実態を正確に反映することにつながったとも考えられる。</p> <p>今後新型コロナウイルス感染が収束に向かうとすれば、肥満児の頻度も徐々に改善されてゆくと思うが、当委員会として、その経緯をしっかりと確認する必要がある。</p> <p><b>資料3-2</b></p> <p>資料によると今年の肥満児の増加率で見ると、4年生が最も大きく5、6年生はやや低くなっている。低学年は調査の対象になっていないのでこの理由は不明であるが、いずれ全国学校保健統計調査をみればどの年齢層が大きな影響を受けているかが明らかになるであろう。性差をみると日頃活発な男子の方が女子より影響が大きいことがわかる。</p> <p><b>資料3-3</b></p> <p>痩身傾向児については対象は4年生に限られるが、その出現率に大きな変化はみられず、平成28年度の突出した高値を除けば、平成24年度以降ゆるやかな減少傾向にあると見てよいだろう。考え方によっては、今回のコロナ禍でやせ児の増加がみられなかったことは、不幸中の幸いと言えるかもしれない。</p>
事務局より	<p>近藤委員の御意見を受けまして、事務局としても今後発表される国や県の結果をふまえ、対応を検討していく必要があると考えます。</p> <p>令和2年度は新型コロナウイルスの影響により、実施を見送った学童期での肥満児童への取り組み（受診のおすすめの発行、児童判定部会、児童健康教室）について、令和3年度以降は新型コロナウイルスの感染防止対策を行いつつ、継続して事業を実施し、肥満児への指導を進め、さらなる肥満の防止に努めてまいります。</p>

以上